

発達障害の基礎知識

—自閉スペクトラム症、ADHD、SLDなどの概要—

柿元 真知

三重県立子ども心身発達医療センター 児童精神科 医長

【発行】

国立障害者リハビリテーションセンター 企画・情報部
発達障害情報・支援センター 1

発達障害について-この講義の目的-

外国につながる子どもに関わる人たちが

- 発達障害の基本的な知識を得る
- 必要時に各機関へのつながりも含めた支援ができる

発達障害のコンセプト

- 発達とは、人が生まれてから死ぬまでの一切の変化のこと
- 発達特性：
子ども(定型発達)とは少し脳の働き方が異なる、多くは生まれつきのユニークな性質
それ自体が強みとなることもある。
- 発達障害：
多数派(定型発達)向きにできている社会の中で生きにくさを抱えている状態



発達障害の診断・介入の目的

診断の目的:

- 支援者側が共通言語(認識)をもつためのツールを持つ
- 同じ自閉スペクトラム症でも困っていること、対応は異なることに注意
例:A君「こだわりが強くて切り替えが苦手」・B君「友達の気持ちがわからず、トラブル」

介入の目的:

- 「やらない」のではなく「できない」
- 「治すのではなくて活かす・補う」(『あなたがあなたであるために』:ローナ・ウイング)
- 特性に応じた環境設定(バリアフリー化・合理的配慮)をし、生きやすくする



医療の枠にとどまらない、社会的な環境への包括的なアプローチが必要

発達障害とは？法律の定義

発達障害者支援法における発達障害の定義(第2条)...

発達障害とは、発達障害(自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの脳機能の障害で、通常低年齢で発現する障害)がある者であって、発達障害および社会的障壁により日常生活または社会生活に制限を受けるもの

(ICD-10疾病及び関連保健問題の国際統計分類におけるF80-98に含まれる障害)

注:法律上は、知的障がい発達障害者支援法上の障害には含まれないが、支援上は共通点が多いので本講演では含める

医学での神経発達症の分類

アメリカ精神医学会:DSM-5-TRより

発達障害の名前	症状
知的発達症:IDD	全体の知的能力のゆっくりさ
限局性学習症:SLD	読み・書き・算数の苦手さ
注意欠如多動症:ADHD	注意の難しさ・多動 かっとなると抑えられない
自閉スペクトラム症:ASD	コミュニケーションや社会性の障害 こだわり
発達性協調運動症:DCD	不器用さ

知的発達症(IDD)

特徴: 知的発達の全体的なゆっくりさ

- 抽象的なことを扱う
- 計画を立てて行動する
- 優先順位を決める

などが小さいころから苦手

評価方法

- 知能検査: WISC-V・田中ビネー知能検査V、発達検査: 新版K式発達検査など
- 生活(学習・社会性・身の回りの行動)の支援の必要度もみて判断
- 日本語能力だけでなく、母語の力も含めて評価

限局性学習症(SLD)

知的能力は正常範囲であるにも関わらず

1. 読字：不正確・速度が遅い読み and/or 理解ができない
2. 書字：綴り字や文章が書けない(漢字が書けない、文法間違いなど)
3. 算数：数字の感覚や計算ができない

※注：

文化または言語の違いがある場合、第一言語の言語習熟度や生活している言語・文化的状況を考慮する ➡第1回総論参照

注意欠如多動症(ADHD)

1. 不注意

- 同じことを集中することが難しい
- 外からの刺激に反応し気が散る
- 忘れっぽさ

2. 多動・衝動性

- じっとできない、授業中の離席
- 待てない(列に並べずうろうろ、質問が終わる前に喋る)など

しばしば、複数の状況で(学校、家、習い事etc.)、6か月以上継続して存在する

自閉スペクトラム症(ASD)

1. 社会性・コミュニケーションの苦手 ➡ いわゆる空気が読めない

- 会話のキャッチボールができない、適切な対人距離がとれない(遠すぎor近すぎ)
- 不自然な話し方 (例:抑揚や場面による調整などが難しい)
- ルール理解が難しい

2. こだわり、感覚過敏・鈍麻

- 同じことを繰り返す
- 儀式的な行動: 新しい場面や変更が苦手
- 感覚過敏・鈍麻: 音・匂い・見るものなどに対して敏感、寒さ・痛みに鈍感



主な発達障害まとめ

<発達障害の主な種類>

知的な遅れが
あることもあります

*がある言葉はDSM-5-TRでの発達障害の名前です

自閉スペクトラム症:ASD *

- 人と会話したり、気持ちを伝えあったりするのがむずかしいです。
- 相手の気持ちを考えたり、場面に合わせて行動するのがむずかしいです。
- いつも同じ行動をしたり、好きなことばかりします。
- 光や色、音、匂い、味などについて、ほかの人よりも強く感じて不快に思うことがあります。反対に、わかりにくいことがあります。
- 言葉の発達が遅れることもあります。

診断を受けた時期などによって、アスペルガー症候群、自閉症、広汎性発達障害(PDD)と診断されている人もいます。

注意欠如多動症:ADHD *

- 長いあいだ、同じことをするのがむずかしいです。
- たくさん動いたり、話したりします。
- 考える前に動くことが多いです。

限局性学習症:SLD *

- 特に「読むこと」や「書くこと」、「算数(数学)」に困っていたり、むずかしいことがあります。学習障害(LD)と呼ぶこともあります。

これらの特性が併存しつつ、
発達年齢と共に変化する

■ トウレット症*や、児童期発症流暢症*(吃音)、発達性協調運動症*も、発達障害の1つです。

例えばこんな症状：～3歳(幼児期前期)

《IDD・ASDなど》

- ・言葉の発達の遅れ

《主にASD》

- ・目が合いにくい・無表情
- ・同じ遊びを繰り返す
- ・音・光・匂いなどに敏感

《ASD・ADHDなど》

- ・かんしゃく
- ・ひどい夜泣き

- ✓ 定型発達の中で一時的に見られるものもある
- ✓ ひとつの症状の存在＝発達障害にはしないこと



例えばこんな症状:4～6歳(幼児期後期)

《主にIDD》

- ・話している内容が理解できない



《主にASD》

- ・ほかの子どもに興味がない
- ・ロゴマークなどへのこだわり



《主にADHD》

- ・説明を最後まで聞けない
- ・友達とうまく遊べず乱暴をする



例えばこんな症状：小学生～

《IDD・SLDなど》

- ・読み・書き・計算が苦手

《主にDCD》

- ・手先が不器用

《ADHD・ASDなど》

- ・一方的に話し続ける

《主にADHD》

- ・授業中にじっとできず動き回る
- ・忘れ物が多い



➡ 授業への不適応や周囲との社会性が育つにつれ、ギャップが目立ってくる時期

発達障害の子どもへの介入の流れ

- ① 特性の把握・診断：成育歴聴取・行動観察・発達検査など
- ② 「困りごと」の内容・背景を分析
- ③ 個々の特性に応じた環境設定（バリアフリー化・合理的配慮）
 - 環境調整：特性に合わせ生活環境を整えたり、適切な社会資源を利用する
 - SST(social skill training)：人との上手な接し方などの社会的なスキルを練習する
 - ペアレントトレーニング：親が子どもの特性と発達に合わせた接し方を練習する
 - 薬：興奮やADHD・不眠などの症状を抑える

環境調整の例



刺激を減らした部屋

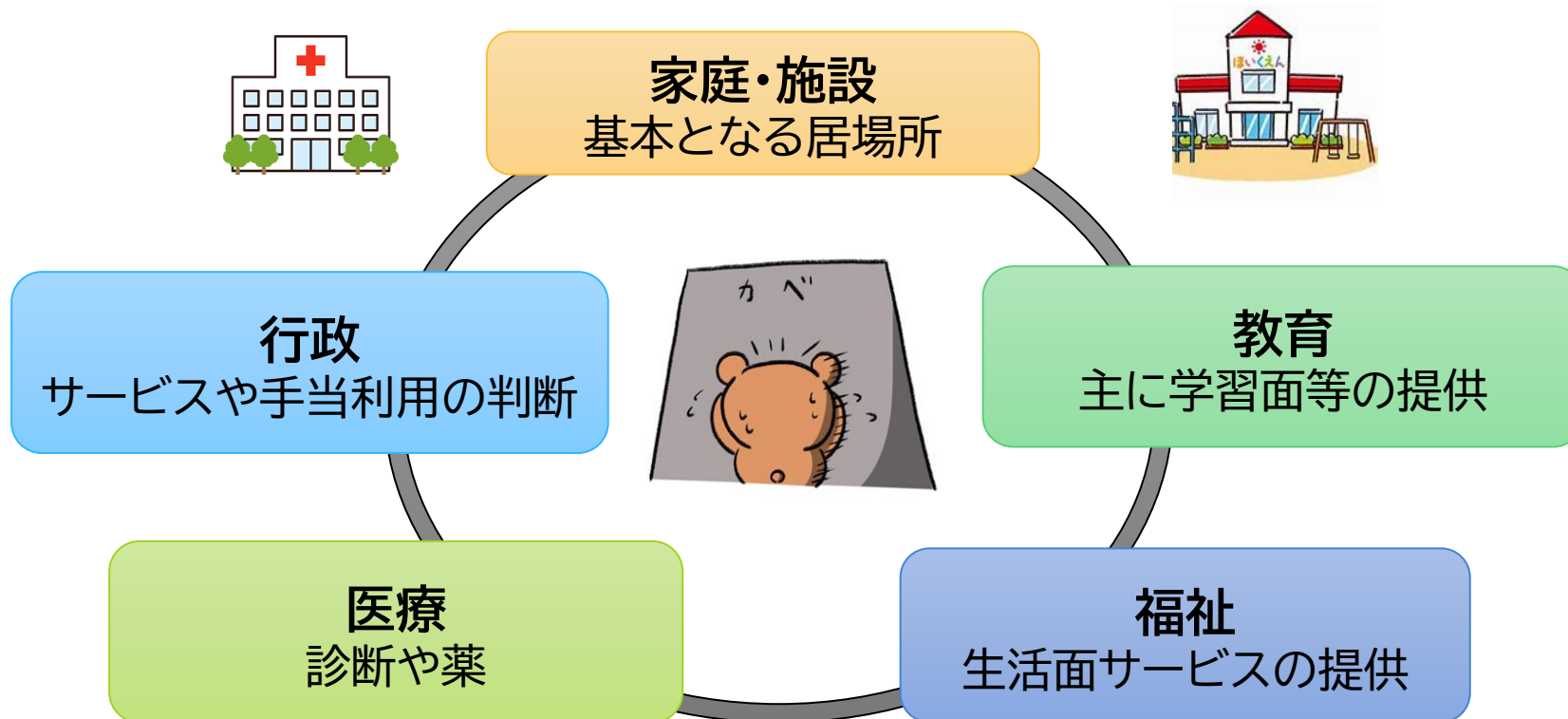
※個々の発達段階・特性に応じた環境設定を



視覚化

発達障害の社会資源と主な役割(一部抜粋)

- 外国につながる子の場合、情報リテラシーの弱さや言語の問題により社会資源につなぐににくいアクセスバリアがある
- つなぎを丁寧にする（例： ×「～に行ってね」 / ○ 一緒に行く、通訳の手配などの配慮を）



外国につながる子どもの発達支援

1. IDD・ADHD・ASDなどの生来の発達特性を理解する

- ・「やらない」のではなく「できない」

2. 個人・発達段階により困りごととはそれぞれ異なる。その子にとって、短期的・長期的に生きやすくなる方法を一緒に考えることが必要

3. 特性の理解や難しい場合、気持ち・行動上の問題が大きい場合は地域の支援機関へつなぐ

- ・外国につながる子のアクセスバリアを考慮する➡誰が、どこに、どのようにつなぐのかを丁寧に
- ・それぞれの地域の第一次支援機関(市町村子ども支援課、発達支援センターなど)を知る